

「妥協点P」 作・柴幸男

【登場人物】

男1 教師、女1の担任
男2 教師、学年主任
女1 生徒
女2 教師、女1の副担任
女3 教師、図書室の司書

0 【舞台設定と前説】

そこは、暗い。
ホコリと少しカビのような匂いがする。
壁に沿って置かれた本棚には古びた分厚い本たち。
部屋にあるのは、小さな机と一脚のイス。
高い位置にある本を取るための台。
窓は分厚いカーテンが覆っている。

ここは、誰も気にとめない場所。
その部屋は、図書準備室である。
図書準備室であり、人間の領域、仮想の未来でもある。

この芝居は、この部屋の中で行われる。
開演の3分前、もしくは直前。
舞台前に女1、男2、女3、やってくる。
客席に向かって立つ。

三人 ……

しばらくして、エプロンと三角巾をした女2、やってくる。

女2 (小走りで)

さらに遅れて、頭に包帯をした男1、やってくる。
こうして、舞台前に五人が揃う。

男2 ……えー本日は、ご来場いただきありがとうございます

男2 開演に先立ちまして、みなさまにお願いがあります。携帯電話、時計のアラーム等、音のなる機器をお持ちの方は、電源からお切りいただけますようお願いいたします

男2 また、上演中の許可のない写真撮影、録音、録画はご遠慮ください

男2 (非常の際の動線を説明する)

男2 上演時間は約65分を予定しています

男2 えー、今から、僕たちが、この後ろに隠れます、それで、だいたい30秒(?)ぐらいたらですね、この人(男1)と、この人(女3)がやってきます、そうしたら、はじまりです。途中休憩はありません

男2 それから、最後に。このお芝居は、とある学校の、文化発表表を題材にした、完全なるフィクションです。実在の人物、団体とは一切、関係はありません。ご了承ください

男2 それでは、最後までごゆっくりお楽しみください

男2、軽く礼。全員、パネルの後ろへと移動する。

30秒後、開演。

「妥協点P」

1【男1と女3が登場する】

男1と女3、話ながらやってくる。
男1は紙の束を持っている。頭の包帯はない。

女3 こんな感じなんですけど、だいじょうぶですか？

女3、電灯のスイッチを探し、押す。
蛍光灯によって部屋の中が照らされる。

男1 あ、もう全然、だいじょうぶです、（咳き込みつつ）ありがとうございます

女3 ああ、窓を開けまじょうか、
男1 すいません、

男1、カーテンを開け、窓を開ける。
窓から光が差し込む。夕日、だろうか。
外で体育か、部活のような、声が聞こえる。

女3 埃っぽいでしょう、図書準備室って言っても、もう今は、ただの倉庫です
ね、

男1、窓に近づき外の景色を見る。

男1 ああ、この窓ってここのだったんですね、お、プール丸見え、
女3 なに、生徒指導ですか？

男1 いや、まあ、はい、
女3 なにやっただんですか？
男1 ええ、まあ、ちよつと、

女3 まあ、深くは聞きませんが、あんまり大きい声を出すと、図書室に聞こえちゃうかもしれないので、気をつけてください、

男1 あ、はい
女3 じゃあ、私、あっちにいますから、終わったら、鍵を返してください、
男1 はい、
女3 じゃあ、

女3、反対側に出て行く。

2【男1、ひとりになる】

男1 ……

イスに腰掛け、紙の束を眺める。

男1 ……

紙の束には文字があるのだろうか。
男1、読んでいる。

3【女2が登場し、男1と話す】

女2、やってくる。エプロンと三角巾はない。

女2 すいません、遅くなりました、

男1 あ、いえ、
女2 あ、どうぞ、おかけになって、こんな部屋があったんですね、

男1 はい、結城先生に言っただけで貸してもらいました、
女2 へえ、結城先生は、図書室ですか？

男1 はい、
女2 ……
男1 ……

女2 え、お話ってなんですか、
男1 三好先生は、これ、読まれましたか、

「妥協点P」

女2 え、
男1 台本です、宮武の、
女2 ああ、はい、読みました、なんとなくですけど、
男1 どう、でした？
女2 え、どうって、よく書けてると思いましたが、
男1 どころへんが、
女2 え、まあ、障害を乗り越えて愛しあう二人とか、それを応援するクラス
とか、
男1 ……
女2 え？
男1 はい、
女2 何か問題が？
男1 はい、
女2 その台本ですか？
男1 そうです、
女2 え、
男1 この「芳雄」というのは教師ですよ
女2 はい、
男1 それで、この「樹里亜」というのは、その生徒です、
女2 はい、……え、それが問題なんですか、
男1 え、問題じゃないですか？
女2 ええ？
男1 教師と生徒が交際しているんですよ、
女2 いや、でも、
男1 なんですか、
女2 え、でも、これは演劇ですよ？
男1 そうです、
女2 実際には、いないんですよ？
男1 そうです、
女2 「芳雄」も「樹里亜」も
男1 はい、
女2 実際にはいない教師と生徒が交際して、なにが問題なんでしょうか、

男1 たしかに「芳雄」も「樹里亜」も存在しません
女2 はい、
男1 でも、これを書いた生徒は存在します、
女2 ……
男1 演劇が終わっても現実が続きます、これから受験も控えてるんです、間違っても変な噂でも立ったらどうするんですか、
女2 いや、それは、
男1 教師と生徒の恋愛なんて、そんな問題が起こりそうな劇をわざわざ文化祭でやる必要はないでしょう、
女2 いや、でも、
男1 なんですか、
女2 いや、でも、たぶん、この台本は「ロミオとジュリエット」を現代の教師と生徒に置き換えた話なんだと思うんですけど、
男1 なんて教師と生徒なんですか、他にいくらでもあるでしょう、いやそれも、なんで置き換えるんですか、そのままやればいいじゃないですか、
女2 ……
男1 宮武に言って、書きなおしてもらいましょう、
女2 ……
男1 すいません、宮武、呼んできてもらってもいいですか、
女2 ……
女2、出ていこうとするが、止まる。
女2 ……
男1 三好先生？
女2 でも、実際によくある話じゃないですか？
男1 え、
女2 教師と生徒の交際ってよくありますよね、
男1 ありません、何を言ってるんですか、
女2 でも、熊楠先生の奥さんってたしか元生徒ですよ
男1 え、
女2 学年主任の熊楠先生、

「妥協点P」

男1 知ってますよ
女2 去年、結婚されたじゃないですか、
男1 知ってます、
女2 奥さん、元生徒だって言っていましたよね、
男1 ……知らないな、
女2 あ、知らんぷらしないでくださいよ、
男1 え、
女2 去年の忘年会で、熊楠先生、酔っ払ってのろけまくってたじゃないですか、実際十一年の大恋愛だって、あ、写真！ 山縣先生も見ましたよね、写真、鼻が、こんな、こんななってる奥さん、
男1 忘れました、
女2 忘れるはずですよ、だって鼻がこんな、こんななってたんですよ
男1 それ、やめてください
女2 やめますから教えてください、これは問題じゃないんですか？
男1 ……問題じゃありません
女2 どうして、
男1 だって、もう熊楠先生の奥さんだから問題ないでしょう
女2 いや、それはおかしいですよ
男1 おかしくありません
女2 だって結婚する前は、結婚してなかったんですよ
男1 え？
女2 結婚してなかったから結婚したんですよ
男1 うん？
女2 じゃあ結婚してないじゃないですか、
男1 すいません、何言ってるのかわかりません
女2 なんでわからないんですか、じゃあ「芳雄」と「樹里亜」も結婚すれば問題ないってことですか、
男1 いやいやいや、それはちがいます、
女2 どうして、
男1 いや、だって、台本の中で結婚しても意味ないでしょう、
女2 いやいやいや、でも二人が交際しているのだから台本の中なんですよ、
男1 そうですよ、

女2 そうでしょう、
男1 だから、そんな台本は認めらないって言ってるんです、
女2 そんなの、変ですよ、
男1 ブレイク！ ブレイク！
女2 ……
男1 ……三好先生、
女2 はい
男1 僕たちは、こんな不毛な議論をしている場合じゃないんです、
女2 不毛って、
男1 問題は、これが文化祭のクラス発表で上演されるかもしれないってことなんです
女2 ……
男1 たしかに誰の目にも触れないのであれば何の問題もありません、教師と生徒の恋愛でも何でも好きに書いたらいい、でも文化祭のクラス発表となったら話は別です、もし発表が問題になった場合は、クラス全員の問題になるんですよ、そうなたら責任取れますか？
女2 生徒たちに聞くべきじゃないでしょうか、
男1 それで、どうしますか、多数決でもしますか、
女2 はい
男1 もし上演が決定したとして、反対した少数派の生徒たちはどうしたらいいんですか、
女2 いや、それは…
男1 内申にケチが付いてしまっても泣き寝入りしろと、
女2 ……
男1 宮武が、書き直すと言ってくれば、何の問題もないんです
女2 ……命令するんですか、
男1 違います、お願いです、
女2 え、
男1 書き直しをお願いをするんです、

女2 もし、そのお願いを宮武さんが聞いてくれなかったら、
男1 そこを、なんとか言い聞かせるのが、僕たちの仕事でしょう、
女2 でも、もう文化祭まで一ヶ月きってますよ、
男1 わかってます、

女2 間に合いますか？

男1 書き直しに時間がかかった場合は危ないでしょうね、

女2 じゃあ、こんな話してる場合じゃないじゃないですか

男1 だから、僕はそう言ってるんです、

女2 鼻の話なんかしてる場合じゃないですよ、

男1 だから、僕はさっきからずっとそう言ってるんです、

女2 わたし、宮武さん、呼んできます、

男1 はい、お願いします、

女2、出て行く。

4【男1、ひとりになる】

男1 ……

男1、イスに座り、白い紙の束を眺める。

男1 っん？

そして、白い紙の束をめくる。

男1 んんん？

5【女2が、再び、登場する】

女2、やってくる。

女2 すいません、遅くなりました、

男1 ……

女2 あ、どうぞ、おかけになって、

男1 ……

女2 あれ、山縣先生だけですか？

男1 ……

女2 宮武さんは？ まだですか？

男1 ……

女2 え？

男1 あの、三好先生は、これ、読まれましたか、

女2 え、

男1 台本です、宮武の、新しい、台本、

女2 え、いや、まだですけど、…え、どうしました？

男1 いや、あの、

女2 え、変わってないとか？

男1 いや、逆です

女2 逆？

男1 変わってます、めっちゃ変わってます、

女2 え、変わってるって、どう、

男1 あの、僕と、先生が出てきました、

女2 は？

男1 だから、僕と、三好先生が登場しました、

女2 え！

男1 それで、あの、言い合いをしています、

女2 ええ！

女2、机の上の紙の束をめくる。

男1 舞台が、この図書準備室になって、僕と三好先生が宮武の台本について言い合ってるんです、

女2 え、え、なんですかこれ、なんですかこれ、

男1 いや、わかりません、

女2 え、え、あ、ほんとだ！ わたしが、わたしが喋ってる！

「妥協点P」

男1 熊楠先生の奥さんの鼻がこんなだとか言ってますよ、
女2 ええ！
男1 ほら、ここ、
女2 あら、やだ！
男1 二人で熊楠先生の結婚について不毛な議論をしています、
女2 山縣先生、ブレイクブレイク言ってますよ、
男1 いや、言いませんよ、

6 【女3、顔を出す】

女3、登場する。

女3 どうかしましたか、
男1 あ、いえ、（とっさに紙の束を隠す）
女3 鼻がどうか、ブレイクがどうか、
男1 いえ、なんでもありません、
女3 鼻がブレイク……、あら、三好先生！
女2 あ、どうも、
女3 どうも、
女2 また、お借りしています、
女3 いいんです、好きに使ってください、
女2 ありがとうございます、
女3 いえいえ、……何か、問題でも？
男1 いえ、何も、
女3 そうですか、
男1 はい、
女3 それじゃ、
男1 はい
女3 終わったら、鍵を、
男1 はい

女3、退場する。

7 【男1と女2、話す】

女2 ……え、これ、この後、どうなるんですか、
男1 いや、その先は、まだ読んでないんですけど、
女2 これはどうなんでしょう、
男1 いや、ダメですよ、絶対、ダメだ、
女2 どうして、宮武さん、こんな台本を書いてきたんでしょう、
男1 我々に対する反抗かもしれませんが、
女2 そんな、
男1 納得してくれたらと思ってたのに、
女2 ……
男1 ?
女2 いや、でも、たしかに、これ、一理ありましたよね、
男1 え、
女2 なんて、私、納得しちゃったんだろう、
男1 え、え、
女2 熊楠先生はよくて、どうして「芳雄」と「樹里亜」はダメなんです、
男1 いや、だから、
女2 学年主任の熊楠先生、
男1 知ってます、
女2 去年、結婚されたじゃないですか、
男1 知ってます、
女2 奥さん、元生徒だつて言っていましたよね、
男1 知ってます、
女2 去年の忘年会で、熊楠先生、酔っ払つてのろけまくってたじゃないですか、
か、実際十一年の大恋愛だつて、あ、写真！ 山縣先生も見ましたよね、写真、
鼻が、こんな、こんななってる奥さん、
男1 わかりました！ わかりましたから、もうその話はやめましょう！
女2 いや、でも、
男1 もうその話は終わったじゃないですか、蒸し返さないでください。宮武の台本通りになつてますよ！

女2 はあ！

男1 熊楠先生の結婚はどうでもいいんですよ、

女2 どうでもいいって、

男1 我々が問題にしないといけないのは、この台本の「芳雄」と「樹里亜」の交際です、

女2 それはそうですけど、

男1 いや、ていうか、もはや問題はそこだけじゃない、こんな実名で僕たちが出ちゃったら、ダメですよ、

女2 たしかに、「芳雄」と「樹里亜」はどこに行っちゃったんでしょうか、

男1 知りませんよ、

女2 あ、でも、いる！

男1 え、

女2 登場人物表にいますよ、「芳雄」と「樹里亜」あ、じゃあ出てくるんですね、

男1 もういいですよ、こんな台本、文化祭で上演できるわけじゃないでしょう

女2 でも、もう文化祭まで3週間きつてますよ、

男1 わかってますよ、書き直しに一週間、かかりましたからね、

女2 (発表) 間に合いますか、

男1 至急、宮武を呼びましょう、

女2 わたし、行ってきます

男1 お願いします

女2、出て行く。

8【男1がひとり残され、台本を読む】

男1 ……

男1、イスに座り、台本をめくる。

男1 …… (無言で、台本の文字に目をやる)

男1、台本を内容を目で追っている。

男1 ……ん？

男1、台本をあわててめくる。

男1 んんん！

9【女2、三度、やってくる】

女2、やってくる。

女2 すいません、遅くなりました、

男1 ……

女2 あ、どうぞ、おかけになって、

男1 ……

女2 あれ、山縣先生だけですか？

男1 ……

女2 宮武さんは？ まだですか？

男1 ……

女2 え？

男1 あの、三好先生は、これ、読まれましたか、

女2 え、

男1 台本です、宮武の、さらに、新しい、台本、

女2 え、いや、まだですけど、…え、もしかして？

男1 いや、あの、

女2 もしかして、

男1 はい、

女2 もしかして、もしかして！

男1 はい！

女2 もしかして！

「妥協点P」

女2、台本を見て、

女2 喋ってる！ 私が、また喋ってる！
男1 言いましたよね、先週、ちゃんといいましたよね、俺と三好先生が登場するシーンを消せって、
女2 これ、増えてるじゃないですか！ 増えちゃってるじゃないですか！
男1 そうなんです、しよっぱなから、俺と三好先生が出てきて言い合いです、で、そのあと、また俺と三好先生が出てきて、あ、俺達が台本に書かれてるどうしようって、むしる、これ、俺と三好先生しか出てきてないですよ！
女2 あとちよっと結城先生、
男1 もう、わけがわからない、
女2 ますます「芳雄」と「樹里亜」は、どこに行ってしまったんでしょう
男1 いや、もういいですよ、それは、
女2 だって、先週は、一応、私たちの反対を押し切って駆け落ちする「芳雄」と「樹里亜」がいたじゃないですか、
男1 追いかける俺から逃げて、ホウ酸団子で無理心中してましたからね、完全に俺が悪者ですよ、
女2 先週のはまだ「芳雄」と「樹里亜」が出てきたのに、これじゃ、なんで題名が「芳雄と樹里亜」なのか訳わかんないですよ、
男1 もういいですよ、こんな台本、文化祭で上演できるわけがない、絶対、
女2 はい、
男1 大人しく聞いてるふりして、全然書きなおすつもりなんかなかったんですよ、あいつは、これは、我々に対する、宣戦布告です！
女2 ……あの、これだったら、最初の台本の方がよかったんじゃないですか
男1 え、
女2 その、シンプルに「芳雄」と「樹里亜」が交際する話の方がよかったんじゃないでしょうか……
男1 いや、だめです、それこそが、あいつの、宮武の作戦なんです
女2 え、
男1 俺たちがそう言い出すのを待ってるんですよ、そんな作戦に屈してはいけません、
女2 でも、どうするんですか、

男1 書きなおしてもらいます、
女2 いや、でも、もう文化祭まで2週間きってますよ、
男1 わかってますよ！ 書き直しにさらに一週間、かかりましたからね！
女2 早く練習させるつもりみんな暴動寸前です！
男1 至急、宮武を呼びましょつ、
女2 わたし、行ってきます、宮武さん、教室ですよ、
男1 はい、たぶん、
女2 はい、
男1 お願いします
女2 宮武さん！ 宮武さん！
女2、出て行く。
10 【男1がひとり残され、台本を読む】
男1、興奮しつつ、勢い良く、台本の続きを確認する。
男1 ……
男1、ふいに誰かの視線を感じ、その方向を見る。
男1 !
11 【女1が登場する】
女1 ……
女1 女1がいつのまにか、立っていた。
男1 ちよつと、ここに座りなさい、
女1 ……
男1 座りなさい！

「妥協点P」

女1、イスに座らない。

男1 どういうことだ、これは、
女1 ……

男1 どうして、こんな台本を書いた、

女1 ……

男1 わかっていると思うが、こんな台本は到底、上演できない、

女1 ……

男1 たしかに、表現は自由だ、だがな、学校は自由じゃない、そして世の中もやっぱり不自由だ、それを学ぶことも、学ばせることも、学校の役目だと思っ
は思っている、

女1 ……

男1 宮武、書きなおすんだ、

女1 ……

女1、おもむろに出て行く。

男1 あ、待て、宮武！ 宮武！ 宮武！

12 【男がひとりになる】

男1 ……宮武、

男1 いや、樹里亜、

男1、以下の台詞を歌う。

男1 (歌って) 宮武、樹里亜

男1 (歌って) どうして、どうして、俺達のことを台本にした、

男1 (歌って) ここに書かれているのは、全部、俺達の思い出じゃないか、

男1、歌いきったポーズのまま止まる。
男1、我に返る。以下の台詞は歌わない。

男1 ……これは、まずい、まずい、まずい、まずいまずいまずい！
おいおいおいおい！ どういうことだこれは！ なんだ、この展開は！ ミュ
ージカルになっちやっってるじゃないか！

13 【女3が、顔を出す】

女3 なにがまずいんですか？

男1 え、あ、いや、こっちの話です、

女3 山縣先生、だいじょうぶですか、思ったこと全部、口から出てますよ、

男1 え、

女3 あら、宮武さん、

男1 え！ (振り返って) あ、

女1、いつの間にか部屋にいた。

女1 ……

女3 あれ、宮武さん、なんか悪いことしたの？

女1 ……

女3 あ！

男1 え、

女3 わかりましたよ、

男1 え、え、

女3 私、わかっちゃいましたよ、これは、文化祭ですね！

男1 あ、いや、

女3 こそこそこそこそ、なにやっってるのかと思ったら、クラス発表の？ 台
本会議？

男1 あ、いえ、え、

「妥協点P」

女3 だって、宮武さんね、あれでしょ、賞、獲ったんでしょ？

女1 ……

女3 ねえ、なんか、演劇部の、ねえ、大会の、なんか、賞、獲ったんでしょ？

女1 ……

女3 すごいわ、ね、そんな、なんか、賞獲るとか、すごいわあ、ねえ、台本書くっただけでもすごいのに、賞までとっちゃうなんて、すごい、あ、それ、台本ですか、

男1 あ、いや、（隠す）

女3 なるほど、秘密にしときたいぐらいの傑作ってことですね、はいはい、じゃあ、本番、期待しときます、

男1 あ、いや、

女3 文化祭まであと一週間ですもんね！ ラストスパート！

女1 ……

女3 じゃあ、終わったら鍵をお願いします

女1 ……

女3、出て行く。

14【男1と女1、話す】

男1、女3が出て行ったのを確認して、

男1 おいおいおい、どうなってるんだ、

女1 ……

男1 黙ってないで答える、なんなんだ、この台本は、

女1 ……

男1 だから、おれは、教師と生徒の交際を書くって言ってんだよ、もう、それだけなんだよ、俺が言ってるのは！

女1 ……

男1 これじゃ、俺とお前が、そういう関係になっちゃってんじゃないかよ、しかも、ミュージカルになっちゃったよ

女1 ……

男1 お前、大人をからかうのもいい加減にしろよ、

女1 ……

男1 だいたい、お前、下の名前「樹里亜」じゃないだろ

女1 ……

男1 俺だって「芳雄」じゃない、亀之助っていう、親からもらった大事な名前があるんだよ、

女1 ……

男1 なが、「俺達の思い出」だよ、ない、こんなことは一度もない、

女1 ……

男1 これは、もう完全なるフィクションだ、デタラメだ、なんでこんな台本を書くんだ、

女1 ……

男1 わかってるんだ、わかっているんだぞ、宮武、こうやって、俺たちを困らせて、結局、最初の台本で押し切るうってというのが、お前の作戦なんだろう、

女1 ……

男1 くそー、思い通りにはさせないぞ！

女1 ……

15【女2と男2がやってくる】

女2、やってくる。

女2 すいません、遅くなりました、

男1 ……

女2 あれ、宮武さんは、……いる！

男1 いますよ、

女1 ……

女2 ちよっと、宮武さん、そんなピクルスみたいにいたりいなかったりしないでよ、今日も来ないかと思って熊楠先生、連れてきましたよ、

男1 え、

「妥協点P」

男2、やってくる。

男2 なんですか？
男1 いやいやいや、
男2 え？
男1 ちよつとなんで熊楠先生なんか、連れて来たんですか、
男2 なんか？
女2 いや、でも、私、考えたんです、やっぱり最初の台本に戻しましょうよ
男1 え、
女2 だって前回の台本じゃ「芳雄」と「樹里亜」をめぐって最後は戦争にな
ってたじゃないですか、
男1 そうですけど、
女2 血みどろの争いはもうたくさんなんです、
男1 それは僕もおなじです、
女2 だから最初の台本に戻して、熊楠先生のお話ってことにしませんか、
男1 え？
女2 だって、現にこうして、熊楠先生は元生徒の奥さんと幸せにご結婚され
てるわけですから、
男2 え、
男1 いやいやいや、
女2 宮武さんもいるし、もうちよつどいいですよ、
男1 なにがですか、
女2 熊楠先生、ちよつと、ご結婚の馴れ初めをひとつ、お願いします、
男2 え、なんですか、急に、
女2 奥さんとの出会いから、ひとつ、よろしく、
男2 いやいやいや、よろしくって、
男1 三好先生、なにがしたいんですか、
女2 もう熊楠先生の演劇ってことにしましょうよ、
男2 え、
女2 そうすれば山縣先生も納得できるじゃないですか！
男1 いや、全然、納得できませんよ、
男2 え、僕が演劇になるんですか、

女2 先生をうちのクラスの演劇にさせてください、
男2 ええ！
男1 ウソですウソです
女2 教師と生徒のラブストーリーです、
男2 え、どつちですか、
女2 これを読んでください
男2 はあ、

男2、台本を手取る。

男1 ちよつとちよつと、三好先生、落ち着いて、
女2 だって、もう私、文化祭の発表が心配で心配で夜も眠れないんです！
男1 それはわかりますけど、
女2 クラスのみんな、もう待ちきれずに獣みたいになってるんですよ、
男1 はい、
女2 私はクラスのみんなに、「芳雄」と「樹里亜」に、幸せになって欲しい
だけなんです、
男1 落ち着いてください
女2 すいません、
男1 三好先生、今週の台本は読まれましたか？
女2 いえ、もう、怖くて、
男1 追い打ちをかけるようなんですが、シヨックを受けるとアレなの
で先に言っときます、あの、今週の展開はさらにまずいことになってます、
女2 え、
男1 いいですか、今週は、僕が「芳雄」なんです、
女2 ……え？
男1 いや、だから、僕が、宮武と交際してるんです
男2・女2 え！
男1 いやいやいや、違いますよ、台本、台本の話です、僕が「芳雄」で、宮
武が「樹里亜」なんです、
男2・女2 ……は？
男1 いや、やっぱりいいです、

「妥協点P」

女2 え、山縣先生って、下の名前、「芳雄」でしたっけ？

男1 いや、だから、違いますよ、亀之助です、

女2 じゃあ、山縣先生じゃないじゃないですか、

男1 え、

女2 山縣先生、だいじょうぶですか、

男1 だいじょうぶですよ

女2 その、度重なる台本直しのプレッシャーで、現実とフィクションがごっちゃになってませんか、

男1 いや、なってません、なってませんよ、あれは完全なるフィクションです、

女2 山縣先生、落ち着いてください、あれは、紙です

男1 いや、わかっていますよ

女2 わかりました、ちょっと私に時間をください、

男1 え？

女2 宮武さんと話をさせてください

男1 いや、

女2 お願いします、

男1 ……

女2、女1に近づく、

女2 ねえ、宮武さん、まずは、先週、そして、先々週、さかのぼって、

先々週のこと、ごめんなさい、

女1 ……

女2 やっぱ生徒の創作物に教師が口を出すのは間違ってたと思えます

女1 ……

女2 宮武さんの台本、一番最初の「芳雄と樹里亜」。私はとてもいいと思った、障害を乗り越えて愛しあう二人が、そしてそれを応援するクラスが、よく書かれていた、

女1 ……

女2 たしかに、教師と生徒が交際する演劇は文化祭にはふさわしくないかもしれない、でもね、あの台本だったらきつとそんな誤解を吹き飛ばすことがで

きる！

女1 ……

女2 だからね、題名、題名だけ「熊楠物語」にさせてください、

男1 いやいやいや、

女2 そうすれば何の問題もなくなるから、

男1 いや、なくならないですよ、

女2 どうしてですか！

男1 いや、題名だけ変えてもダメですよ、

女2 だって、山縣先生と宮武さんの意見を両立するには、もうそれしか方法がないんです、

男1 お気持ちはうれしいんですが、全然、両立できてないですよ、

女2 どうして！

男1 だいいち、熊楠先生がいつて言う訳ないでしょう、

女2 そんなの聞いてみないとわからないじゃないですか、

男2 え、

女2 どうなんですか、先生！

男2 いや、というか、……なんですか、これは……、

男1 あ、

気まずい間。

男2 え、ちよつと、これ、なんですか、

男1 え、

男2 どういうことですか、これ、説明してください、

男1 ……

男2 うちの、嫁の鼻は普通です！

男1・女2 え、

男2 ちよつと、これ、なんなんですか！

男1 え、いや、それは、

男2 え、お二人とも、こんなこと言ったんですか？

女2 いやいやいや、ちがいますちがいます

男1 言ってます、言ってます、

「妥協点P」

男2 うちの嫁の鼻は普通です、だって、お二人とも見たじゃないですか、写真、忘年会で、見たでしょう
男1 あ、はい、写真見ました、
男2 見たでしょう、
女2 はい、見ました
男2 え、変な鼻でしたか？

本当に微妙な一瞬の間。

男1 いいえ、
女2 いえ、
男2 なんです、今の微妙な間は、
男1 いや、熊楠先生、説明させていただきます、奥さんの鼻はとりあえず置いといて、
男2 いやいや置けないでしょう、鼻、どうやって置くんですか、鼻置いちゃったら、大変なことになりますよ、
男1 いや、今のは言葉の比喻で、
男2 鼻置いたら、匂いわかんないんですよ、顔のバランスだいがおかしくなりますよ、
男1 はい、それは、そうなんですけど、
男2 なんです、うちの嫁は、置いときたいくらい変な鼻だとそう仰りたいんですか、
男1・女2 いやいやいや、
男2 (ポケットから携帯をだして) 本人、本人、呼びますか、ここに、
男1 いやいやいや、あの、いい鼻でしたよ、ねえ、
女2 ええ、なかなか、立派な、鼻でした、
男1 うらやましかったですもん、あんな鼻、の奥さん、
女2 あんな鼻、売ったら、わたし買います
男2 まあ、そこまで言うほどの鼻じゃないですけど、
男1 ……
男2 これは、一体、なんなんですか
男1 台本です、演劇の、

男2 それはわかってます、誰が書いたんですか、
男1 え、宮武です、
男2 まさか、これを文化祭で上演するつもりじゃないでしょうね、
男1 あ、いや、ちがいます、ちがいます、
男2 じゃあ、なんなんですか、これは、
男1 いや、たしかに文化祭用の台本ではあるんですが、
男2 やっぱり！
男1 いやいや、でも僕も、こんな台本では上演できないって言うてるんです
男2 当然です、絶対にダメです
男1 だから宮武に書き直しをお願いしてるんです、でも、当の宮武が全然、書き直してくれないんですよ、
女2 そんな、宮武さんは書き直しました、
男1 でも、どんどんひどくなってるじゃないですか、悪意のある改変かしらないですよ、
女2 違うんです、熊楠先生、最初は、普通のラブストーリーだったんです、何の問題もなかったんです
男1 いやいやいやいや、ありました、問題ありました
女2 どころですか、こつちの台本の方が問題ありまくりじゃないですか、
男1 だから、書き直しをさせなさいけないって言うてるんじゃないですか
女2 だから、そんな時間はもうないって言うてるんじゃないですか
男2 ちよっとちよっとちよっと！ ちよっと待って下さい！ お二人とも落ち着いて！
男1 ……
女2 ……はい
男2 詳しい事情はわかりませんが、詳しい事情はわかりませんが、とにかく、文化祭の発表なら、それにふさわしい内容にしてください、これは絶対です、
男1 もちろんです、
男2 それから、嫁の鼻に対するいわれのない誹謗中傷は一切、削除してください！ これも絶対です！
男1 ……
女2 じゃあ、題名を「熊楠物語 嫁の鼻は普通」にすれば問題がないということ、

「妥協点P」

男2 は？
男1 いや、だから、三好先生！

16【女3が登場する】

女3 書き直す必要はないわ、宮武さん
全員 え、

女3、やってくる。

女3 先々々週からごちゃごちゃごちゃごちゃ、何をやってるかと思ったら、まさかこんな話をしていたとは、

女2 あ、いや、

女3 宮武さん、書き直す必要はありません、鼻でも何でも好きに書きなさい

男2 え！

男1 え、いや、何を言ってるんですか

女3 これは、検閲ですね

男1・女2 ……

女3 山縣先生！ 三好先生！ 熊楠先生！

男2 え、俺も？

男1 いやいやいや、違いますよ、

女3 なにが違うんですか、

男1 書き直しをお願いしてただけなんです

女3 それを検閲というんです

男1 いえ、あの、違うんです、宮武の台本に、ちょっと不適切な箇所があったので、

女3 不適切？

男1 そうです、

女3 鼻が、不適切？

男1 ……

女3 不適切な、鼻？

男1 ……

女3 バカバカしい！ 鼻に適切も不適切ありますか！

男1 いや、鼻の話はどうでもいいんですよ、

男2 おい、こら、

男1 はい、すいません！ 普通、鼻、普通！ あの、最初から説明させてもらえませんか、……いいですか、

女3 どうぞ、

男1 あのですね、文化祭のクラス発表で、うちのクラスは演劇をやることになりまして、その台本を宮武が書くことになったんです、

女3 はい、

男1 で、宮武が書いてきた台本をです、一応、わたしと、三好先生とで確認したんですけど、それが、もう思い起こせば3週間前なんです、その台本の中身にですね、ちょっと問題があったわけですよ、

女2 いや、私は問題とは（思いませんでしたけど、）

男1 うん、三好先生、まずは、説明させてください、お願いします、

女2 ……はい、

男2 問題って、具体的にどんな内容だったんですか、

男1 まあ、要するに、教師と生徒が、交際をするという、

女3 交際？

女2 純愛ラブストーリーです、

男2 はあ、

男1 で、それは、ちょっとまずいんじゃないかとなりまして、それで、宮武に書き直してもらおうと、そういう話になったんですよ、

女3 だから、それが検閲だと私は言っているんです、

男1 いや、命令ではなく、お願いをしただけなんです、宮武に書き直しをお願いをして、それで、次の週に新しい台本を書いてきてくれたんです

女3 じゃあ、何も問題ないじゃないですか

男1 そうしたらですね、その新しい台本に、僕と三好先生が出てきたんです

女3 は？

女2 熊楠先生の結婚について議論を、

女3 ……は？

男2 ここです、ここ、ここ

女3 え？

「妥協点P」

男2 ひどいんですよ、僕の嫁の鼻がこんなだって言ってるんですよ、
女3 こんな、とは？
男2 え、
女2 おそらく、こんな、ということだと思っただけですけど、
男2 こらこらこら！
女2 ひえー、私が思ってるわけじゃなくて、
男1 まあ、それで、そんな台本も当然、上演できませんから、さらに書き直しをお願いして、そうしたら、その次の週にまた新しい台本が出来たんですよ
女3 それでおわりですか、
男1 いやまだです、で、今度も、僕と三好先生が、出てきて、で更に、それが台本になっていることに驚いている僕と三好先生がいて、で、これはもつとまずいと、で、書き直しをしてもらって、それで、
女3 おわり？
男1 いえ、さらに、書きなおした台本が、それです。で、いよいよ、この中では、僕が「芳雄」になってしまったと、そういうわけです、
女3 なるほど……、
男1 ……
女3 さっぱりわかりません！
男1 ですよ、いや、最初は、もっとシンプルな話だったんですよ、だから文化祭のクラス発表で教師と生徒の恋愛モノっていうのは不適切だから書きなおして欲しいと、もうそれだけの話なんです、
女3 ……どうして不適切なんですか、
男1 いや、だって、不適切でしょう
女3 だから、どうして、不適切だと思われるんですか、
男1 いや、それは、不適切だから、不適切としか言いようがないですよ、
女3 山縣先生、それは論理的とは言えないですね、
女2 そうです、
女3 熊楠先生、どう思われますか？
男2 いやあ、その、台本を最後まで読んでないのでわかりませんが、それだけじゃ不適切とは言えないかもしれないですね、
男1 いや、でも、実際に未成年との交際は条例で禁止されているわけですし
女3 それは現実の交際の話ですよ、

女2 しかも、熊楠先生は現実に交際しましたが罰せられてません、
男2 え！
女3 演劇ならば問題ないのでは、
女2 そう、そうなんです、
男1 いや、でも、もし問題になった場合は、どうするんですか、
女3 だから、どうして問題になるんですか、
男1 いや、噂が立つかもしれない、
女3 どんなん？
男1 いや、例えば、例えばですよ、僕が、クラスの誰かと付き合っているかもしれないとか
女3 付き合ってるんですか？
男1 いや、そんなわけじゃないでしょう！ 何を言ってるんですか、
女3 じゃあ、噂になっても困らないでしょう、
男1 いや、ダメですよ、これから受験も控えてるんです、なにが問題になるかわかりません、
女3 しかし、まだされてもない噂だけが不適切の根拠と言われても宮武さんも納得できないでしょう、
男1 いや、だって、あ、校則でありますよね、えっと、第何条かありましたけど、えっと、あれです、高校生らしい、健全な生活を心がけよとか、ありましたよね、どなたか、どなたか生徒手帳、持ってませんか？
全員 ……
男1 なんて、誰も持ってないんですよ、
男2 なんてって我々、教師ですし、
男1 宮武は、宮武は持ってないのか、とにかく、教師と生徒が交際する演劇というのは健全ではないでしょう、校則違反！これが根拠です！
女3 ……憲法、21条、第二項、
男1 え、
女3 ご存じですか、
男1 ……
女3 「検閲は、これをしてはならない」
男1 ……
女3 校則、と憲法、守るべきはどちらですか、

「妥協点P」

男1 いや、それは、
女3 答えてください、どちらを順守すべきですか、
男1 ……
女2 ……私は、どちらでもないと思います、
男1 え、
女3 「ほう？」みたいな顔をして女2を見る
女2 守るべきは校則でも、憲法でもない。私たちは、人間。私たちは、人間。なら、最後に守るべきは「人の道」ではないでしょうか。
女3 ……
女2 校則も、憲法も、所詮は人間が作ったもの。そんなものはクソ食らえ。本当の、本当の、人の道は（胸をたたき）ここ、我々のここにあるものじゃないですか！
女3 ……
女2 こんなジメジメして、薄汚い部屋に宮武さんを呼んだ時点で、やましいことをしている自覚が、私のここに、そして、山縣先生のおそこにあつたと思うんです
男1 え、
女2 私たちは、まず、それを認めなければいけないと思います
女3 ……（静かに手を叩く、それはゆっくりと大きくなり、強い拍手へ）
男2 （同じく感動して、拍手）
男1 ……
女2 終わったことをごちゃごちゃ言うのはやめましょう、大切なのは未来。未来のためにどうするか、一緒に話しあいましょう！
女3 イグザクトリー！ その通りです！
女2 ありがとうございます！ ありがとうございます！
男2 いやあ、いいもの聞かせてもらいました（握手）
女2 てへ、では、まず、状況を整理させてください、
女3 どうぞ、
女2 えっと、まず、結城先生は、検閲はしてはいけない、教師と生徒の交際を描いた台本も問題ない、そういうご意見ですね、
女3 はい、そうです
女2 で次に、山縣先生は、教師と生徒の交際を台本に書いてはいけない、書

き直すべきだという、ご意見でよろしいですか、
男1 もちろんです、
女2 はい、そして、熊楠先生は、教師と生徒の交際を台本にしても問題はない、正しいですか？
男2 いや、問題ないとは言いつれませんが、
女2 台本の中でも教師と生徒は交際してはいけなないと、
男2 いや、まあ、それ言っちゃったら、うちの嫁さん否定しちゃうのと一緒にすかね、わははは、
女2 じゃあ、問題ないということでもいいですね、
男2 まあ、いいですかね、
女2 そして、奥さんの鼻は普通であると、
男2 当然です、当たり前でしょう、なに言ってるんですか、怒りますよ、
女2 はい。最後に、私。私も、書き直しには反対です、
女3 はい
女2 と、いうことは、検閲に賛成してるのは、山縣先生だけになりますね、
男1 いやいやいや、おかしいおかしいおかしい、
女2 なにかおかしいんですか、
男1 いや、僕だって、別に検閲に賛成してるわけでもないですし、あと、そもそも、これはうちのクラスの問題ですから、結城先生と熊楠先生は関係ないん（じゃないかと思うんですが……）
男2 ちょっとちょっとと、
女3 この部屋、貸してくださいって言ったのは山縣先生じゃないですか、何週間、貸してると思ってるんですか、
男1 いや、それはそうなんですけど、
男2 こんだけ人を巻き込んでいて今さら関係ないはないでしょう。
男1 わかりました、わかりました！ それは、すいません！ お二人のご意見もちゃんと、はい、
女3 もちろんです、
男1 いや、僕はそんな、検閲とかじゃなくて、ちょっと設定を変えられないかって言ってるだけなんです、
男2 設定って？
男1 何も、教師と生徒じゃなくなっちゃっていいじゃないですか

「妥協点P」

女2 寺子屋の先生と生徒とか？

男1 変わってない変わってない、

男2 医者と看護婦とか？

男1 もっとまずいもっとまずい、

女3 天狗と河童とか？

男1 意味分かんない意味分かんない、

女2 じゃあどうしたらいいんですか、

男1 だって、元は「ロミオとジュリエット」なんですよ

女3 そうなんですか？

女2 たぶん

男1 じゃあ「ロミオとジュリエット」でいいじゃないですか

女2 でも、もう文化祭まで一週間しかないんですよ、そんな、いまさら「ロミオとジュリエット」なんて、衣装も、セットも用意できませんよ、

男1 いや、それが宮武の思う壺なんですよ、それじゃ、我々、教師の敗北です！

女3 勝ちとか負けとかじゃないでしょう、

男1 だって宮武は、一度も、ただの一度も、僕の意見を聞いてくれなかったんですよ、まったく意見を曲げなかった、曲げようとしなかった、

女3 素晴らしいじゃないですか

男1 素晴らしいですか？ それが素晴らしいことですか？ 人の意見にまったく耳をかさなかったんですよ！

女2 山縣先生だって意見をまったく変えなかったじゃないですか、

男1 そですよ、その点では、僕も宮武も一緒です、でも、じゃあ、どうして、僕が、僕だけが、意見を曲げなきゃいけないんですか、

女3 話にならないですね、

男1 わかりました、わかりました！ いいでしょう！ じゃあ、僕は、こっちの台本を支持します！ この台本です！ こっちも宮武が書いた台本ですよ！ それならばみなさんも文句はないでしょう！

女2 山縣先生……

男1 でも、いいですか、こっちの台本では、僕と宮武が交際することになります！ 結末はまったくわかりません！ でもきつと悲劇でしょう！ だって教師と生徒が交際してそれが世に知られるわけですからね！ それでもいいん

ですか！ みなさんは！ え、それでいいのか！ 宮武！ これで満足か！ つきあうか！ おう！

気まずい、間。

男2 ……山縣先生、

男1 はい、

男2 (肩を組みながら) まあまあ、ちよつと落ち着きましようか、

男1 いや、僕は、落ち着いてますよ

男2 どうですか、ちよつと、外の空気でも、吸いにいきませんか、

男1 いや、どうしてですか、いいですよ、

男2 まあまあまあ、そうおっしゃらずに、

男1 いや、いいって言うてるじゃないですか、ちよつと、離してくださいよ

男2 だいじようぶだいいじようぶ

男1 だいじようぶじゃなくて、ちよつと、離して、

男2 落ち着いて、ねえ、宮武も、見えますから、

男1 いや、離してください、

男2 だいじようぶ、だいじようぶ、

男1 離してって言うてるでしょうが！

男2 はいはいはい、どーどーどー

男1 俺は馬じゃない！

とか、なんとか言いながら、男1と男2、出て行く。

女3 ……

女2 ……

廊下から、男2の大声が聞こえてくる。

男2 (声のみ) あ！ こら！ 待て！ 逃げるな！

女2と女3、思わず走って出て行く。

17【女1がひとりになる】

女1、ひとり残されるが動かない。おもむろに声を上げる。

女1 図書準備室を飛び出した山縣先生は階段で滑って転び、三階から一階へと、そのまま一気に落ちていきました、

女1 5分後、救急車が学校へと到着、山縣先生は近くの病院へと運ばれましたが、打ちどころが悪かったらしく、先生の短い生涯は、その日の夜に幕を下ろしました

女1 こうして、この物語は、悲しい結末を迎えた、

女1 かのように思われました

女1 が、しかし、この物語には、意外な続きがあったのです、

女1 この事故を受けて、一週間後の文化祭は中止、そして、その日は山縣先生の告別式になりました、

女1 そう、山縣先生は、勝ったのです

女1 先生は命をかけて自分の意見を曲げないことの大切さを私に教えてくれました、ありがとうございます、ありがとうございます、山縣先生、そして、さようなら、山縣先生、

女1、おもむろに立ち上がり、出て行く。

18【無人の舞台】

舞台には誰もいなくなる。

19【男2と女3が入ってくる】

男2、入ってくる。

男2 ……

男2、意味ありげな顔で部屋を歩いたあと、

男2 え、おしまい？

男2、後ろの誰かと話しているようだ。

男2 え、それでおしまいですか？

女3、続いて入ってくる。

女3 いえ、その後、宮武「樹里亜」も階段から一気にダイブ、

男2 え！

女3 「芳雄」とは、実は山縣先生の別人格だったみたいです、

男2 ええ！

女3 こうして「芳雄」と「樹里亜」はあの世で永遠に愛しあうのです、

男2 ……

女3 おわり、

男2 いやいやいや、後味悪すぎでしょう！

女3 たしかに、

男2 皮肉がききすぎですよ

女3 そうですか？

男2 文化祭で上演できるレベルを超えています、

女3 まあ、それはそうかもしれませんが、

男2 たしかにね、うちの嫁の鼻は、若干、あれです、でもね、僕はもっそれはまったく気にしてないんですよ、

「妥協点P」

女3 熊楠先生、
男2 たしかにね、昔は気になりましたよ、ずっと、デート中もね、鼻が気になりましたよ、でも、鼻を補って余りあるほどの魅力がうちの嫁にはあるんです、そう思って我慢して一緒にいるうちにね、不思議と気にならなくなるんです、
女3 熊楠先生、
男2 そんな完璧な人間なんていませんよ、僕だって完璧じゃありません、嫁も僕の何かを我慢してるはずですよ。いいじゃないですか、我慢し合えば。そうやって、お互いに我慢しあって何かを築き上げていくことこそ大切でしょ。この世で一番、大事なのは我慢です。僕から言わせれば、山縣先生も、宮武も、我慢が足りないですよ、僕は嫁の鼻についてこんなに我慢してるのに！
女3 熊楠先生、
男2 はい、
女3 のろけはけっこう、
男2 いや、のろけじゃないですよ、
女3 ひとつ、いいですか？
男2 なんですか、
女3 熊楠先生、読んでないでしょう！
男2 あ、
女2 なにが意見を聞きたいですか、あらずじ全部、わたしに喋らせて、
男2 あ、いや、
女2 自分で読むのが面倒だったただけでしょう！
男2 ばれた
女2 ばれたじゃないですよ
男2 そんなことより、宮武の台本ですよ、
女3 ごまかして、
男2 どうしましょう、
女3 どうしましょうとは、
男2 だって、当然、その台本もだめでしょう
女3 山縣先生は認めないでしょうね、
男2 ていうか間に合うんですか、演劇ってそんな簡単につくれるもんなんですか、

女3 それは知りませんが、
男2 だって文化祭まであと三日ですよ、
女3 あつというまに一ヶ月が過ぎてしまいましたね、
男2 ……なんでこんなことをするんでしょう、
女3 え、
男2 なんて、宮武は、そんな台本を書いてくるんでしょうか、
女3 何を書こうが、宮武さんの自由です
男2 わかりませんね、あの年頃の女子は、ほんとにわかりません、
女3 でも、結婚されたじゃないですか、
男2 は？
女3 あの年頃だった元生徒の奥さんと、
男2 いやいやいや、ちがいますよ
女3 なにが違うんですか、
男2 いや、僕は、あれですよ、僕は、ちゃんと卒業してからですよ、
女3 なにがですか？
男2 いや、そういう個人的な付き合いは、卒業してからです、
女3 と言うのは建前で、
男2 いやいやいや、本当です、在学中は何もありません、
女3 と言いつつも実際は、
男2 実際も何もないですよ、やめてください、
女3 熊楠先生、
男2 はい？
女3 だいじょうぶですよ
男2 はい？
女3 誰にも言いませんから、
男2 え、
女3 もうここらで楽になりましょうや、
男2 やめてください！
女3 だって気になるじゃないですか、
男2 結城先生、意外と下世話だなあ、
女3 げしし
男2 ……いや、ほんとはね、その、就職のね、相談をされているうちに、で

「妥協点P」

すけども、

女3 あら、じゃあ、

男2 いや、でも、本当に、卒業してからです、交際は、

女3 デートは？ 最初のデートは？ いつ？ どこへ？

男2 勘弁してください！

女3 げしししし、

男2 笑い方まで下世話になってますよ！

女3 あ、

20 【女2が入ってくる】

女2がいつの間にかいた。

女3 ……最近、図書購入の予算が減っていて、本当に大変なんです、

男2 不景気ですね、来年の修学旅行は潮干狩りという噂もあります、

女2 結城先生、熊楠先生、楽しそうですね、

男2 いや、そんなことないですよ

女3 そうです、まったくつまりません、

女2 山縣先生と宮武さんは、

男2 は？

男2 ここに来てないですか

男2 まだ、みたいですけど、

女2 そうですか……、

男2 ちよつと三好先生、だいじょうぶですか？

女3 ここ、座りますか、

女2 すいません、だいじょうぶです、

女2、イスを断る。

男2 生徒たちの様子はどうですか、

女2 落ち着きました

男2 え！

女2 はい、みんなほつとしたみたいです、

男2 え、どうしてですか、

女2 わたし、もう限界だったんです、

男2 はい、それは、もう、よくわかってます

女2 だから、わたし、もう昨日の夜中、2時ぐらい、居てもたってもいられなくなつて、電話をかけたんです、

男2 え、夜中の2時に？

女3 どこへ、

女2 親戚のおじさんです

男2 どうして、

女2 迷惑なことは重々承知です、でも、もう限界だったんです

女3 いや、いくら限界でも、

女2 おじさんはじゃがいもをつくってるんです、ハウスなんですけど、化学肥料少なめで、ほくほくで本当に美味しい、おいもさん、

男2 はあ、

女2 それでわたし、おじさんにありつたけのおいもさんを送ってほしいって、泣きついたので、

男2 え、

女2 そしたら今朝、うちの玄関の前に、金色に輝くとれたてのおいもさんが！

男2 ええ！

女2 その量、およそ230キロ、

男2 ちよつと三好先生なにやってるんですか、

女3 そうですよ、そんなに食べたなら毒ですよ、

女2 食べません、

男2 え、

女2 文化祭です、

男2 は？

女2 お二人は、見たことないですか、最近、お祭りによくある、くるくるしたポテト、

男2 え？

女2 こう、螺旋状に、くるくるってしてるやつです

男2 え？

女2 え？

女2 こう、螺旋状に、くるくるってしてるやつです

「妥協点P」

男2 ああ
女3 なんか、見たことありますね、
男2 たしかに、最近、よく見ますね、
女2 あれ、いつからあるんでしょう、流行ってるんですかね
女3 いや、知らないですけど、
女2 なんてあんな形してるんですか？
男2 いや、わかりません、
女2 あのくるくるが美味しんですかね、
男2 いや、美味しいんですか？
女3 いや、私、食べたことないんで、
男2 僕もです、
女2 わたしもです、あれたしかによく見るんですが、なんか買う気にならないんですよね、あのくるくるがどうもおもちゃみたいでなんか食欲がわかない
男2 はあ、たしかに
女2 はい
男2 え、で、そのくるくるとしたポテトがどうかしたんですか？
女2 文化祭であれをやることにしました
女3・男2 ええ！
男2 どうして！ そんな美味しいかどうかもよくわからないものを！
女2 いいんです、もういいんです、うちのクラスはおじさんのおいもさんでアシをやるんです！
男2 アシをやるんですって……
女3 (男2に) いいんですか？
男2 まあ、喫茶店みたいのをやるクラスもありますから、
女3 もともと演劇だったのに、
男2 そんな、くるくるしたポテトだなんて、
女3 三好先生、ほんとに生徒たちは納得したんですか、
女2 だって、もうどうしようもないじゃないですか、発表が中止になるよりはって、
男2 まあ、たしかに
女3 しかし、くるくるしたポテトが学校生活最後の思い出というのは……

男2 ポテトを見る度に思い出すんでしょうね……
女2 ああ！（罪悪感で頭を抱える）
女3 熊楠先生、これ以上、三好先生を追い詰めないでください、
男2 ごめんなさい、
女2 ……いいえ、わたしも、わたしもそう思います、だから、山縣先生と宮武さんに最後のお願いをしたんです、
男2 え？
女3 最後のお願い、って？
女2 ふたりが納得できる方法を考えてくださって、そして、クラスのみんなを納得させてくださいって、
男2 え、
女2 もし、それができなかつたら、うちのクラスの発表は、くるくるしたポテトになります、そう伝えたくて、
女3 それは、
女2 もしふたりで話し合う気があるなら、もう一度だけ図書準備室に来てくださいって、
女3 ああ、それで、
男2 ……いや、でも、来ますかね、ふたりとも、あの調子じゃもう話し合うとかそういう感じには思えませんけど、
女3 熊楠先生、

21 【女1が登場する】

女1が立っている。

女2 ……宮武さん！
女1 ……
女2 ありがとう！ 来てくれたのね、先生、もう宮武さんが来てくれただけでうれしい……、
女3 宮武さん、その、手に持ってるのは、……台本？
女1 ……
女3 読んでもいいかしら、

「妥協点P」

女1 ……(差し出す)
女3 ありがとう、

女1、出ていこうとする。

女2 え、ちょっと待って！ ちょっと待って！ 宮武さん！ どこに行くの？

女1、出て行く。女2、ついて出て行く。

男2・女3 ……

22【女2と女3と男2が話す】

男2 ……え、新しい台本ですか？
女3 おそらく、

女2、戻ってくる。

女2 トイレだそうです、
男2 で、今度はどうなってるんですか？
女3 ちょっと待って下さい、今、見えますから、
女2 あ、台本の話は、わたしの、いないところをお願いします、
女3 あら
女2 ひー！
男2 どうしました
女3 全然、ちがいます
女2 ひー！
男2 え、
女3 ほら、
男2 ほんとだ、
女2 (奇声)

女3 三好先生、だいじょうぶですよ
女2 え、
女3 もう山縣先生も、三好先生も登場してないですよ、
女2 ……え、本当ですか、
女3 本当です、
女2 え、それって、

女2も台本をのぞく。

女3 熊楠先生、よかったですね
男2 え、
女3 ほら、題名、
男2 ……熊楠物語！
女2 熊楠物語！
女3 熊楠物語、
男2 いやいやいや、これちょっと待って下さいよ
女3 主人公の名前が熊楠芳雄になってますよ
男2 いやいやいや、ちょっと、
女2 え、でも、ちょっと待って下さい、
男2 え？
女2 ふん、ふん、
男2 ?
女2 ふんふん！ ふん！ ……ふん！
男2 なんですか、
女2 いや、これ、たしかに、題名は「熊楠物語」になってますが、中身は、一番、最初の台本です、一番最初の、あの幸せだったころの「芳雄」と「樹里亜」です！
男2 え、そうなんですか？
女2 おかえり、おかえりなさい、
男2 いや、三好先生、泣くことないじゃないですか、
女3 たしかに、これは最初の台本みたいですね、
男2 え、わかるんですか、

「妥協点P」

女3 はい、わたしも読ませてもらったんで、なかなか、よく書けてます、
女2 これを持ってきてくれたってことは、この台本を上演したってことで
すかね、

男2 え！

女3 そうなんじゃないですか

男2 いやいやいや、

女2 熊楠先生、了承してくれますよね！

男2 いや、でも

女2 タイトルだけなんです、あとは完全なるフィクションです、

男2 はあ、

女3 ちゃんとはじまる前に断ればいいんじゃないですか、フィクションです
って、それならば、問題ないですよ

男2 いや、まあ、ちょっと読んでもいいですか、

女2 はい、

男2 はあ、

女2 結城先生もいいですか？

女3 私は、宮武さんがいいなら、問題ありません、

女2 はい！ 最初からこれを上演してれば何も問題はなかったのに、山縣の
野郎さえあんなこと言い出さなかったら……

男2 いやいやいや、宮武もたいがいだと思いますよ、

女2 早く読んでください！

男2 はあ、

男2、台本を読み始める。

女3 相当、きつい言い方でもしたんですか？

女2 え、

女3 最初の書き直し的时候に、だって、それでもなきや、あんなことしない
でしょう、

女2 いいえ、その、最初のうちは山縣先生も穏やかにお願いしてたんです

女3 なんて

女2 いや、「教師と生徒の交際なんて考えられない」って、

女3 まあ、普通ですね、

男2 ……もしかして、

女3 え、

男2 あ、いや、なんでもないです

女3 なんですか

男2 いえ、なんでもありません

女3 なんでもないことないでしょう、

女2 そうですよ、なんです、早く読んでください

男2 え、

女3 なんですか、

男2 いや、もしかして、ですよ

女2 はい、

男2 もしかしてのもしかしてです

女3 なんですか、

男2 いや、あの、笑って、聞き流してくださいね、

女2 わかりましたから、

女3 早く言ってください！

男2 いや、……もしかして、宮武は、その、好き、だったとか、

女3 は？

男2 いや、だから、

女2 山縣先生を、ですか？

男2 ……はい、

問。

男2 いや！ そんなわけじゃないですよ！ いやいや、忘れてください！

女3 熊楠先生、

男2 はい

女3 完全なるセクハラですね、

男2 ええ！

女3 そういうことしか考えてないんですか、

男2 そんなことないですよ

「妥協点P」

女2 いや、それはどうでしょう、
男2・女3 え、
女2 だから、宮武さんが山縣先生に好意を寄せているというのは、
男2 いや、ほんと言ってみただけですから、
女2 そんな感じじゃたくないですよ、
女3 いや、意外とわからないかもしれないですよ、
男2 え、
女2 でも、山縣先生のどこを？ どこを好きになるんですか、
男2 いや、その言い方もどうかと思いますけど、
女2 どうしてですか？
男2 それじゃ、山縣先生に魅力がまったくないみたいじゃないですか、
女2 じゃあ、熊楠先生は山縣先生のどこが魅力だと思うんですか？
男2 え、……ごはんを美味しそうに食べるところ（とか）
女2 ほら、ないじゃないですか、
男2 え、
女3 誰が誰を好きになるのが自由です
女2 ま、そうですけど
女3 それこそどうでもいいでしょう、現実には何かあったわけじゃないんです
から、
女2 いや、でも、
女3 え、
女2 でも、もしそうだったんだとしたら、そんな、個人的な事情に、わたし
たち、クラスのみんなは巻き込まれたってことですか？
男2 いや、わかりませんから、
女3 そうかもしれませんね、
男2 結城先生、いや、もう忘れてください、ちょっと試してみただけですか
ら
女2 もし、そうだったら、わたし、許せないです、
男2 いやいや、
女3 許せない？
女2 だって、そんなの、許しません、
男2 いや許さないって、ねえ、

女2 ぶちます、
男2 いやいやいや、
女3 暴力ですよ、
女2 じゃあ、……言ってみせて聞かせます、
女3 は？
女2 だから、言ってみて、わたしの、みんなの気持ちをわからせませ
女3 わかりますかね、
女2 わからなかったら、……もつと言います、
女3 そうですね、結局はそうするしかないんでしょうね、

23 【男1がやってくる】

頭に包帯を巻いた（メロンカバーでも可？）、男1やってくる。

女2 山縣先生！
男1 ……
女2 来てくれたんですね！
男1 はい、……宮武は？
女3 もう来てます、今は、トイレに、
男1 そうですか、熊楠先生、
男2 え、
男1 あらためて、すいませんでした、
男2 いえいえ、もういいですよ、こっこそすいませんでした、
女3 頭の検査の方は？
男1 だいじょうぶみたいです
女2 よかった、
男1 はい、なにより、他の生徒を巻き込まなくてよかったです
女2 あの階段、滑りやすいんですね、
女3 ワックスのせいじゃないですか、
男2 ああ、
女3 熊楠先生、こんど会議で言ってください
男1 それは、

「妥協点P」

男2 あ、これは、
女2 新しい台本です、
男1 え、
女2 宮武さんが持ってきてくれました、
男1 宮武が、
女2 題名は「熊楠物語」、
男1 え、
女2 ですが、中身は、一番最初の「芳雄と樹里亜」です
男1 ……
女2 熊楠先生の許可もとりました
男2 ええ！
男1 ほんとうですか？
男2 いや、ちよつと、ちゃんと読んでから、
女2 ……わたし、山縣先生にも、怒ってます、
男1 はい、
女2 でも、今は、そんな話をしている場合ではありません、今は、一刻もはやくクラスみんなに台本を届けたいんです、
男1 ……
女2 山縣先生、この台本を上演して問題ないですね、
男1 ……
女2 山縣先生！
男1 三好先生、
女2 はい、
男1 あれから数日、僕も、考えました、
女2 はい
男1 特に、病院のベッドの上は、静かで、落ち着いて考えられました、
女2 はい、
男1 自分は、山縣亀之助は、教師として、どうするべきだったのか、どうするべきなのか、

女2 はい、
男1 三好先生、僕は、生徒たちに尊敬される教師でありたい、
女2 はい
男1 いつだって、どこへ出たって、恥ずかしくない、そんな教師になりたい
女2 はい、
男1 僕が最も尊敬する人は、ソクラテス
女2 は、
男1 ソクラテスは、死刑になるその瞬間でも、自分の意見を曲げることはなかった、
女2 え、
男1 僕がかつてソクラテスから学んだ、そして今回、宮武がそれを思い出させてくれた、この世で、一番大事なことは、ブレないこと、
女2 ちよつと、
男1 三好先生、
女2 ちよつと待って下さい、
男1 この台本を認めることはできません、
女2 ひゅ！
男1 書き直してもらいます
女2 きえー！
男2 ちよつと三好先生！
女2 山縣！ 山縣！ お前を！ お前を！ くるくるにしてやる！
女3 熊楠先生！
男2 はい！ またか！
女2 はなして！ はなして！
男2 おい、お前ら、見せもんじゃないぞ！
男2、女2を連れて出て行く。
24 【男1と女3が話す】
男1 ……
女3 山縣先生、

「妥協点P」

男1 ……すいません
女3 もう、そろそろだと思えますよ
男1 はい
女3 つまらないことだと思いませんか
男1 思います、
女3 何をそんなに意地をはるんのですか
男1 いえ、意地ではありません
女3 それは、意地です、子どもと一緒にです、
男1 ……

間。

男1 ……わかりません、
女3 ……
男1 気持ち悪いんです、単純に、許せない、考えられません、
女3 ……
男1 たとえ演劇でも、僕は、それを肯定することはできない、
女3 ……
男1 たしかに、つまらない、くだらないことです、
女3 ……
男1 食べ物の好き嫌いと同じくらいくだらないことかもしれない
女3 ……
男1 教師と生徒の交際を描いた演劇というのは、ひとつの例でしかないんで
す
女3 ……
男1 人と、人が、ぶつかったとき、どうするべきなのか、僕は、僕自身で、
彼らにそれを教えなければいけないんです
女3 クラス全員の思い出を犠牲にしてもですか、
男1 大事なのは、感情じゃない、理性です、
女3 それが理性ですか、
男1 どう思おうが、思われようが、真は変えられません、

間。

女3 たしかに、好き嫌いはあるでしょう、アレルギーで死んでしまう場合も
あります、
男1 ……
女3 でも、私たちは、一緒にテーブルで食事をしなければいけないんです、
男1 ……
女3 いえ、しなければいけないことはないですね、たしかに、ひとりで食べ
たらいい、ひとりならば何を食べようがどんな食べ方をしようが自由です、
男1 ……

女3 でもね、山縣先生、
男1 ……

女3 ずっとひとりの食事ほど味気ないものはないですよ、
男1 ……はい

女3 もう十分、学んだと思います
男1 ……

女3 その姿勢にこそ、憧れていたのかもしれない
男1 え？

女3 適当です、忘れてください、
男1 え、

女3 あら、
男1 え、

25 【女1が登場する】

女1がいつのまにかいた。

男1 ……宮武、
女1 ……
女3 じゃあ、あんまり大きい声を出すと、図書室に聞こえちゃうかもしれな
いんで、気をつけてください、
男1 え、

「妥協点P」

女3 急がないと、ポテトになってしまいますよ、
男1 は？
女3 じゃあ、私、あっちにいますから、終わったら、鍵を返してください、
男1 はい、

女3、出て行く。

26 【男1と女1が話し合う】

短い間。

男1 ……ここに座るか、

女1、動かない。

女1 ……
男1 わかった、座らなくていい、だが、今度は逃げないでくれ
女1 ……
男1 俺も、逃げないから
女1 ……
男1 宮武、前に話したよな、表現は自由だけど、学校は自由じゃないって、
そして、世の中もやっぱり不自由だって話、
女1 ……
男1 でもな、俺は、間違っていたのかもしれない、
女1 ……
男1 一番、不自由なのは、自分だ
女1 ……
男1 自分が一番、自分を、不自由にさせる、
女1 ……
男1 もしかしたら、他人は、不自由な自分を、自由にしてくれる存在なのか
女1 ……
男1 ……
女1 ……

男1 いや、過去の話はやめよう、三好先生の言うとおりだ、大切なのは、そ
う、未来だ、
女1 ……
男1 未来の話を、俺と、一緒にしてくれるか
女1 ……
男1 この台本、「熊楠物語」、ひどい題名だ、
女1 ……
男1 でも、これがお前の妥協点なんだな
女1 ……
男1 今から、一緒に、教室に行こう、
女1 ……
男1 クラスのみんなには俺から話す
女1 ……
男1 今まで、すまなかった、
女1 ……
男1 さあ、行こう、

女1、動かない。

女1 ……それで、おわりですか？
男1 え、
女1 それで、このお話は、おわりですか？
男1 え、いや、
女1 ……
男1 ……宮武？
女1、おもむろに男1の持っている台本を奪い取る。
男1 え、おい、おい！ 宮武！ ああ！ おい！
女1、窓から、台本をばらまき捨てる。

「妥協点P」

男1 なにをやってるんだ！ 宮武！
女1 それは、こっちのセリフです
男1 え？
女1 山縣先生こそ、何をやってるんですか、
男1 え、いや、ちよつと、
女1 違うでしょう、そうじゃないでしょう、
男1 え、
女1 そんな中途半端な妥協じゃ、終われないでしょう
男1 え、いや、
女1 お互いが、本当に納得できるまでぶつかってこそ、妥協点でしょう
男1 おい、
女1 これはもう、私と、山縣先生だけの、問題じゃないんです
男1 え、
女1 私たちが簡単に折れて済む話じゃない、
男1 ……
女1 一緒に考えてもらいましょう
男1 は、
女1 このお芝居を見る全員に一緒に考えてもらいましょう、一緒にぶつかって、一緒に妥協点を探してもらいましょう、誰があっていて、誰が間違っているのか、私たちの正しい選択とは何なのか、
男1 ……
女1 本当の、新しい、台本です、
男1 え、

女1、新しい台本を取り出す。

男1 ……(受け取る)
女1 これは、もう演劇ではありません
男1 え、
女1 これは、未来のための思考実験です
男1 ……
女1 もう芳雄も樹里亜も出てきません

男1 え、
女1 だけど、全員が、彼らについて考えている
男1 もしかして、
女1 はい
男1 ……おい！
女1 この一ヶ月、ここで起こったこと、今ここで起こっていること、そして、これからここで起こる、そのすべてが、書かれています、
男1 え、
女1 山縣先生も、三好先生も、熊楠先生も、結城先生も、わたしも、みんな、この中にいます
男1 いや、ちよつと待て、
女1 みんなにも、ここに來てもらいましょう
男1 ……
女1 わたしたちはどうしたら一緒にテーブルにすることができなのか、
男1 ……
女1 これは、その、ほんの一例をまとめた、発表です、
男1 ……
女1 どうですか、文化祭にふさわしい内容でしょうか？
男1 ……
女1 読んでください
男1 え、
女1 教室で待ってます
男1 ……
女1 早く來てくださいね、こんどは、私たちが、妥協させる番です
男1 ……
女1、出て行く。

27 【男1、ひとり残る】

男1 ……

「妥協点P」

手に持っている台本を、読む。

男1 ……

28 【女2がやってくる】

エプロンと三角巾をした女2、やってくる。

女2 ……山縣先生、

男1 あ、

女2 山縣先生！ こんなところに居たんですか、なにやってるんですか！

男1 すいません、

女2 早く手伝ってください、人手足りないんだから、

男1 いや、でも、僕、頭、こんなだし

女2 なんだって仕事はありますよ

男1 ええ、

女2 もうすごい売れ行きなんですよ！ やっぱあのくるくるに美味しさの

秘密があったんですね、

男1 はあ

女2 はあって、あ、山縣先生、食べてないでしょう、

男1 いや、あの、僕、あれ、なんか食欲わかないんですよ

女2 だめですよ、好き嫌いしたら

男1 はい

女2 芝居のお供にって、バカ売れなんですよ、

男1 へえ

女2 へえじゃなくて、人が来すぎて、もう大変なんですよ

男1 え、

女2 そりゃ、みんな見に来るでしょう、さんざんもめにもめた発表だって、

噂になってるんですから、

男1 へえ

女2 へえ、じゃなくて！ はやく！

男1 はいはい

女2 もう！ お願いしますよ！

女2、出て行く。

29 【男1がひとり残される】

男1 ……

男1、台本を読む。

男1 ……

男1、台本を持って、出て行く。

舞台には誰もいなくなる。

「妥協点P」おしまい。

本作品は、劇団うりんこの依頼で執筆されました。
本作品の著作権は、作者である柴幸男に帰属します。
その他、問い合わせは作者が所属する劇団「ままごと」まで。

ままごと HP www.mamagoto.org
MAIL mamagoto.org@gmail.com